

二種深信考

——親鸞の信における時の構造——

堤 玄 立

一者決定深信^ニ自身現^ニ是罪惡生死^ニ凡夫曠劫^ニ已來常沒常流轉^ニ無^レ有^ニ出離之緣^一 二者決定深信^ニ彼阿彌陀佛四十八願攝^ニ受^ニ衆生^ニ無疑無慮乘^ニ彼願力^ニ定得^ニ往生^一

唐の善導の『觀經疏』散善義にみえる右のことばは、古來「二種深信」と呼ばれ、淨土教の信の要諦を端的にあらわすものとして重視されている。この中、第一の「機の深信」は、われわれが現に罪惡生死の凡夫であり、曠劫已來流轉しつづけてきた救われたい存在であると、深く信ずることである。思うに、われわれ有情の生存を意味することばに、十二緣起の「有 bhava」という語があるが、阿含の教説では「三有」を意味したといふ⁽³⁾。これは、いわばわれわれの生存が「世界内存在」であることを意味するといってもよいであろう。そして、説一切有部が「有」を「業有」と解釋したことは、「世界内存在」の時間性を主體的に追求したものとして

注目に値する。もとより有部の論理はきわめて對象論理的であり、三世兩重の因果説に見られるように、時間が連續的・直線的にとらえられているようであるが、しかしこの「業有」という解釋には注目しなければならない。有限なものが世界の内であてどなくさまよい無限の生滅をくりかえしてゆくすがたは、まさしく生死 (saṃsāra 輪廻) と名づけるのにふさわしいが、このような流轉輪廻の原因を根源にさかのぼって追求するとき、われわれは無始以來の無明↓行という流れにゆきつかざるを得ない。つまり、われわれがみずからの意志 (思業) によつて善惡の行爲 (思已業) をなすという點からいえば、われわれはわれわれ自身のある方を自由に選ぶことができるといえようが、かかる業を造る主體そのものが無明↓行に縁^よつてあるのである。すなわち、われわれはわれわれの背後に無明↓行という底なき闇を背負えるものとして存在し、それゆゑに善業であれ惡業であれ、善惡の如何を問わず、

個々の業を造ることによって、いよいよ根源的な無明に還歸せしめられ、ますます無底の深淵に墮ちこまざるを得ないのである。われわれは「有」を「業有」として解釋する有部の考え方の中にこうした意味を汲みとりえないであろうか。それは或はあまりにも穿ちすぎた見方であり正統の解釋を逸脱するものであるといわれるかもしれない。しかし、「業有」といわれるときの業は、善因樂果、惡因苦果としての果報をもたらす個々の業でもなく、またそれらの業の總和でもなく、むしろそれらの一切の根源にはたらく「無明↓行」の流れそのものではないであろうか。「宿業」という考え方に、私はそうした意味を汲みとることができると思うものである。

宿業とは、いうまでもなく宿世の業因を意味するが、この宿業の問題を徹底して追究した一つの立場に『歎異抄』の説がある。「兎毛羊毛の端にゐる塵ばかりも、造る罪の宿業にあらずといふことなし」という考え方である。つまり、はるかな過去以來造ってきた業に報われて、現（存）在が成立し、現（存）在はそれによって決定づけられ、未來もまた必然的にそれによって方向づけられるとする見解である。ところで業がもし人間の自由意志にもとづく自由な行爲であるとすれば、その行爲の結果としての未來の果報は現在の業が自由に選びうる筈である。にもかかわらず、現（存）在は宿業によ

って必然的に運命づけられているというのはどうしたことであろうか。ここに「無明↓行」としての、より根源的な「業」を考えざるを得ない。つまり、「業有」としての存在であるわれわれは、無限の過去以來の無明↓行によって、つねに輪廻し底なき虚無に墮ちつづけていると考えてよいであろう。しかもわれわれは、その無底の深みに墮ちまいとして、自らの自由意志にもとつき必死にその虚無から脱出しようとするが、むしろ自由意志が逆にはたらいで、われわれを一そうその深みに誘ひこみ、かくて輪廻は盡きる期がないわけである。こうした輪廻を主體的に言いあらわせば「業」と呼ぶのが最もふさわしいのではなからうか。このような「業」はまさしく「罪業」と名づけられるべきである。罪とは苦の果報を招く惡しき行爲を意味するといわれるが、根源的には、個々の行爲としての業や、あるいはその總和ではなくて、さきに述べた「無明↓行」の流れそのものこそ罪にほかならず、そして、無始已來乃至今日今時に至るまで、生死海に流轉し漂没しつづけているすがたこそ、まさしく罪業のあらわれにほかならない。かくて「業有」としての生存は宿業の様相をもつ。現（存）在は、絶對過去の必然として規定された、のがれることのできない現（存）在なのである。

第二の「法の深信」は、こうした救いがたい者をこそ救おうという本願力の救済を深く信することである。ところで、

その救いは願力自然として、絶對の過去からの必然であるといわなければならない。經典の説示によると、阿彌陀佛は十劫の古にすでに正覺を成就されている。つまり、十劫正覺ということは、われわれにとっては、何にもまして絶對の過去の出來事である。だが、それは決して單なる過去の出來事ではない。「たとひ佛を得たらんに……もし生まれずば正覺をとらじ」と誓われているように、衆生の救済の完成——未來における往生淨土の成就ということを離れてはいないからである。十劫正覺ということは阿彌陀佛の淨土建立ということと切りはなすことはできないが、淨土は、われわれにとっては、つねに「願すべきもの」「往生すべき所」として絶對の未來にあるのであり、往生淨土ということは、出離の縁のない身にとつて、全くあり得ない可能性にほかならない。しかも、この全くあり得ない可能性が、願力廻向の信心としてむこうからおとずれてくるのである。さきに願力自然を絶對の過去からの必然であると述べたが、逆に、現（存）在にとつては、救済は願力廻向として絶對の未來からのおとずれであるともいうことができる。つまり、信心決定というそのことにおいて、信一念の現在に、十劫正覺の絶對の過去が過去のままだに現在前し、往生淨土の絶對の未來が未來のままだに現在前するのであり、「法の深信」はこの消息を示している。すべては彼方からのものとして絶對の未來からのほたらきかけにお

いてあるのであるが、それが現在前する相は、「疑なく慮なく、彼の〔絶對の未來からはたらきかけてくる他力廻向の〕願力に乗じて、定んで〔未來に〕往生を得と、〔この現在の一念に〕信ずる」とことといえるのではなからうか。

親鸞は「信の一念」について、「信樂開發の時剋の極促を顯はし、廣大難思の慶心を彰はす」と述べているが、絶對の彼岸にあるもの、そのゆえにわれわれにとっては絶對に未來であるものが、今に至りといいたのが「信樂開發の時剋の極促」であるといつてもよいであらう。だが、未來が現在前するといつても、しかも未來はあくまでも未來なのである。われわれは現に、穢土にある存在として、曠劫已來の過去の業を背負い無窮に輪廻すべく運命づけられた存在として、未來の淨土からは全くへだてられているからである。しかも今、現在の信一念において、過去の業的必然の繫縛から完全に斷ちきられることが確約されたのであった。それはただ、その誓約を信するほかはないことであり、いわば、絶對の未來が未來のままで、いま、現在におとずれたというほかはない。かくて、信一念の現在に、絶對の未來によって曠劫已來の過去からへだてられた現在であると共に、しかも未來はあくまでも絶對の未來として現在からへだてられているという二重の構造をもつのである。『愚禿鈔』に「本願を信受するは前念終なり、即得往生は後念即生なり」といわれているが、前念

命終としてわれわれはすでに既往の過去からわすらわされることなく、死して甦った存在として、すでに未來の中にある。しかも、われわれは宿業にもよおされて何事をもしかねまじき存在として、信前も信後も罪惡生死の凡夫であることにはかわりがなく、未來往生を期待する。信一念の現在とはまさにこのような二重の構造をもつわけである。要するに、信一念の現在において、全く超越的な未來——それは具體的には淨土として示される——が、未來のままで現（存）在の前にたちあらわれて既往の過去の死を告知し、「信樂開發の時剋の極促」として、現實の「今」に佛法を現成するのであって、その「今」は、いわば未來中心的な絕對現在ともいふべきである。すなわち、「信」の現在には「證」の未來ときびしい斷絶を示しつつ、しかも證が信として自己疎外的に現在化するとともに、いわば、證なき證^①としての即得往生となるのであって、機法二種の深信はこれを如實に示すものといわなければならぬ。「機の深信」において、「無始已來、今日今時に至るまで」の虚假性・不實性を、未來の「證」とのきびしい斷絶においてあらわにして淨土をねがわせ、「法の深信」において、疑なく慮なくすでに未來の中に攝取せられてゐることを信知せしめられるのである。かくて、「信一念」の現在には、他力廻向として「證」の未來を中心に絶えず現在が充實せしめられてゆくという形において、「證」へという

往相的時間と「證から」という還相的時間とを内包した絕對現在として成立しているのである。（一九六四・七・三一）

1 眞宗聖教全書一・五三四頁

2 親鸞は『教行信證』『文類聚鈔』等にこれを引用し、『愚禿鈔』には、二種深信を指して「今、この深信は、他力至極の金剛心、一乘無上の眞實信海なり」といつている。だが、同書には「第一の深信は、決定して自身を深信する、即ち是れ自利の信心なり。第二の深信は、決定して乗彼願力を深信する、即ち是れ利他の大信海なり」とも述べており、検討すべき問題があるが、今はこれにはふれない。

3 舟橋一哉『原始佛教思想の研究』一一七頁

4 上田義文『佛教における業の思想』五六頁

5 上田博士は前掲書二四頁に「個々の善業や惡業、換言すれば相對的存在としての人間存在は、それが時間的・相對的存在として宿業に貫かれてあることによつて、すべて罪でないものはない。宿業は、三世を貫いて一切の時間的なものを罪ならしめてある所の根源的な罪である」と述べている。

6 西谷啓治『親鸞における「時」の問題』（しんらん全集一〇所收）参照。なお曾我量深『歎異鈔聽記』三四一頁には「純粹未來」の説がある。

7 親鸞『教行信證』信文類（眞聖全二・七一頁）

8 親鸞『愚禿鈔』（眞聖全一・四六〇頁）。なお、この語からすると、前念と後念との二念になるが、これはむしろ信一念の両面であると思考する。詳細は別に論じたい。

9 武内義範『教行信證の哲學』一五七頁には、「即得往生」「必得往生」の語によつて信の二重構造を明らかにしている。

10 武内、前掲書、一四〇頁・一五二頁。